

## 比較表現「AはBより～」再考 ・日本語教育における的確な導入例を考える・

鈴木智美

東京外国語大学留学生日本語教育センター

tmsuzuki@tufs.ac.jp

### 1. はじめに

本稿は、日本語教育の立場から、比較表現「AはBより～」について再考することを目的とする。「AはBより～」は、初級段階で取り上げられる文型の一つであるが、同じく二者間の比較の表現とされる「AのほうがBより～」、あるいは「AとBとでは、Aのほうが～」などとまとめて扱われる場合が多く、主要な初級日本語教科書を見ても、それらの表現との違いが、必ずしもわかりやすい形で示されているとは言えない。

本稿では、この「AはBより～」が、どのような時にどのようなことを述べようとする際に、その文型の文型たる意味をもっともよく発揮するのかについて考察したい。そして、この表現を日本語教育の現場で教える際に、どのような文脈・場面を設定すれば、その特徴をわかりやすく示すことができるかを考える。

### 2. 先行研究における分析

比較表現を扱った先行研究では、この「AはBより～」のみを取り上げ、詳しく扱ったものは見られない。しかし、この表現の本質に迫ると思われる記述はいくつかなされている。

渡辺（1995:67-68）は、例えば「コンパクトディスクは、シングル盤より小さく、カセットテープより薄い」（下線は引用者）は、「コンパクトディスクについての説明」であるとし、「コンパクトディスクってどんなの？」と聞かれた時にこのように答えると分析している。コンパクトディスクの「大きさ」については「シングル盤」を、「厚さ」については「カセットテープ」を引き合いに出し、その程度性を示そうとするものだとしている。

松岡監修（2000:170-172）でも、「太田さんは小林さんより速く走れる」（下線は引用者）は、「太田さん」が話題になっている場合に用いられ、これは「太田さんは速く走れますか」という質問に対応するものだとする。一方、「太田さんのほうが小林さんより速く走れる」は、「太田さん」と「小林さん」を比べる場合に用いられ、これは「太田さんと小林さんとはどちらが速く走れますか」という質問に対応するものだとしている。

言葉を補いつつまとめれば、重要なポイントは以下の2点に集約される。

(1) 「AのほうがBより～」は、「AとBとを互いに比較して述べる」ものだが、「AはB

より～」は、「A」について述べるものである。「Aはどのようなものか」という問いに対する答えを示すものと位置付けられる。

- (2) 「AはBより～」は、「A」について、「B」を引き合いに出して、それとの比較の観点から述べるものである。

しかし、分析・記述を精緻化するためには、次の2点を解決することが課題として残される。また、分析の成果を、十分な形で日本語教育の現場へ還元することも必要である。

- (3) 「AはBより～」は、「A」について、どのような文脈で、どのようなことを述べようとする際に用いられるのか。さらに言えば、「Aはどのようなものか」という問いは、どのような状況・文脈において設定され得るのか。
- (4) なぜ「B」を引き合いに出し、それとの比較の観点から「A」について述べるのか。

### 3. 日本語教科書および指導書等における扱い

主要な初級日本語教科書、文法解説書、教師用指導書における「AはBより～」および「AのほうがBより～」の扱いは、およそ以下のように分類できる。

- (5) 「AはBより～」、「AのほうがBより～」は、いずれも「比較」の表現である。
- (6) 「AはBより～」は、「A」を主題化したもの、「A」について述べるものである。
- (7) 「Aのほうが(Bより)～」は、「AとB(と)では、どちら(のほう)が～か」という質問に対する答えである。

(5)では、両文型の違いは明確にはおさえられていない。(6)は、「Aは～」の形をとる表現のすべてにあてはまることとなってしまう、「AはBより～」の持つ特徴については積極的に扱われていない。(7)も、「AはBより～」については(6)と同様の扱いにとどまる。

### 4. 本稿における提案

本稿では、「AはBより～」は、「AのほうがBより～」とは表現意図の明確に異なる文型であるとし、この文型が文型たる意味をもっともよく発揮できるよう、日本語教育においてこれを的確な文脈のもとに導入・提示するという方向を考えたい。

#### 4.1. 「AのほうがBより～」-AとBとの比較

「AのほうがBより～」は、これまで多くの教科書・指導書類で既に扱われている通り、「A」と「B」の2つを比べ、ある観点において、どちらかがより程度性がまさっているということを述べるものである。わかりやすく言えば、「AとB(と)では、どちら(のほう)が～か」という問いに対する答えとして位置付けられる。

この文型については、これまでにも既に指摘されている通り、気候・地理・産業等のデ

一タをもとに事実を比較するものから、学習者それぞれの考え・意見をその理由も含めて問うものまで、工夫次第で、様々な興味深い比較を設定することができる。

- (8) 「AのほうがBより～」を導く問いの例 - 「AとB(と)では、どちらのほうが～か」
- 夏と冬では、どちらのほうが好きか / 国の料理と日本の料理では、どちらのほうが {おいしい / 好き} か / 都会と田舎では、どちらのほうに住みたいか / 料理を作るのと、料理を食べるのでは、どちらのほうが楽しいか / スポーツをするのと、スポーツを見るのでは、どちらのほうがおもしろいか / 長い小説と短い小説では、どちらのほうが好きか / 日本語と××語 (= 学習者の母語等) では、どちらのほうが (発音 / 文法が) {難しい / やさしい} か / 外国語を読んだり書いたりすることと、外国語を聞いたり話したりすることでは、どちらのほうが {難しい / 好き} か / 速く走ると、長く走るとでは、どちらのほうが難しいか / 男の人と女の人では、どちらの方が強いのか / 子どもと大人では、どちらの方が {自由 / やりたいことができる} か / 子どもをしかることと、子どもをほめることでは、どちらのほうが難しいか / 小学校の先生と大学の先生では、どちらのほうが大変か / 日本と×× (= 学習者の国等) では、どちらのほうが雨が多いか / 日本は、食料の輸出と食料の輸入では、どちらのほうが多いか / ガソリン自動車と電気自動車では、どちらのほうを買いやすいか / レモン1個とイチゴ20個では、どちらのほうがビタミンCが多いか

#### 4.2. 「AはBより～」 - Bを参照点としてAについて述べる

一方、「AはBより～」については、なぜ「A」について述べる際に「B」が引き合いに出され、比較されるのか、そこにどのような意味があるのかを考える必要がある。

本稿では、この「AはBより～」において、「B」は「参照点」(reference point)として機能していると考え、「参照点」とは、我々が、ある対象をとらえようとする際に手がかりとして用いる、よりとらえやすい、目標となる対象とは別の、認知的に際立った対象のことである。

このことを考えると、第2節の(3)(4)で示した問題点については、それぞれ以下の(9)(10)のように答えを与えることが可能となる。

- (9) 「AはBより～」は、典型的には、話し手が、聞き手にあまりよく知られてない「A」について、より詳しく述べようとする際に用いられる。「Aはどのようなものか」という問いは、あまりなじみのない、あるいは十分な情報を持っていない「A」について、人が知識を得ようとする際に立てられる問いである。
- (10) 話し手は、聞き手が十分な情報を持っていない「A」について、よりわかりやすい、あるいはよりなじみのある、認知的に際立った「B」を参照点として持ち出し、そ

れとの比較の観点から目標となる「A」について述べる。

実際に、このような文脈で用いられている「AはBより～」については、新聞記事データ等から多くの実例を採取することができる。

では、日本語教育の現場では、どのような文脈によってこの特徴を示すことができるだろうか。例えば、以下のような導入例が考えられる。

(11) 「AはBより～」が用いられる文脈の設定の一例

話題：日本での旅行、日本の歴史、日本の地理など

京都を知っているか、行ったことがあるかなど、まず日本国外においてよく知られていると思われる「京都」を話題として出す。次に「奈良」はどうかとたずねる。京都は有名でよく知られているが、その場の何人か（あるいは全員）には、奈良はあまりよく知られていないということを確認した上で、奈良について、たとえば以下のように説明する。

- ・奈良も古い町です。奈良には有名な大仏があります。外国から観光客もたくさん来ます。古くて、有名な寺や建物も多いです。奈良は、710年から784年まで、日本の首都でした。奈良は、京都より歴史が古いです。

日本あるいは学習者の出身国や、世界各地の歴史・地理・気候、人物、生産物、珍しい動植物などについての説明、あるいはまだよく知られていない新しい機器や製品等の説明、互いに面識のない家族等の紹介の場面が設定可能であると考えられる。

## 注

- 1) 文化外国語専門学校編著（2000）では、特に明確な説明はないが、「私の国はマレーシアです。マレーシアはタイの南にあります。マレーシアは日本より少し小さくて、暑い国です」のように、本稿での考えに近い例文も挙げられている。

## 参考文献

- 安達太郎（2001）「比較構文の全体像」『広島女子大学国際文化学部紀要』第9号 pp.1-19
- 大石初太郎・南不二男（1983）「＜参考＞これまでの文型研究」国立国語研究所『話しことばの文型(2) - 独話資料による研究 - 』（国立国語研究所報告23）4版 pp.253-272（初版1963年）
- 文化外国語専門学校編著（2000）『新文化初級日本語I』凡人社
- 松岡 弘監修 庵 功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 渡辺史央（1995）「日本語の比較表現についての一考察 - 比較の基準と程度性について - 」 神戸市外国語大学 文法研究会『さわらび』4号 pp.65-75